

日本の構造家の歴史

「構造家」という言葉は、1946年の『建築雑誌』に掲載された棚橋諒（1907～1974）のエッセイに見られます。棚橋は、ここで「計算はしなくても建築家は構造家でなければならず、第一義的な構造家は同時に建築家でなければならない」と述べています。ここでは「構造家」と「建築家」は一体のものとして扱われていますが、独立した「構造家」の職能が認知されはじめたのは、1950年に横山不学が専業の構造設計事務所を開設し、前川國男らとの協働を始めた頃からのようです。そして、「構造家」の職能を確立したのは、前川國夫事務所から横山不学が開設した横山構造設計事務所に移り、後に独立した木村俊彦であったと思われます。木村俊彦は、自らの事務所で多くの構造家を育て、渡辺邦夫、梅沢良三、新谷真人、佐々木睦朗、池田昌弘、佐藤淳などを排出しています。また、金箱温春も、後に横山構造設計事務所に入所し、この事務所で経験を積んだ後に独立しています。一方、東大から前川國夫事務所に入所した丹下健三は、後に東大に帰り、東大の教授となって行きます。したがって、丹下健三の建築を技術的に支えたのは、同じ東大の教授であった坪井善勝でした。坪井善勝は、後に東大生産技術研究所の教授となり、田治見宏、青木繁、若林實、川口衛らを育てます。そして、東大退官後は日本大学の教授となり、斎藤公男（まさお）、今川憲英（のりひで）、中田捷夫（かつお）らを育てます。

以下は、丹下健三以降の著名な建築家と構造家を、隈研吾が「現代日本建築の四相」で述べている世代区分にしたがって分類したものです。（建築家は隈研吾が挙げたものです。）

第一世代

建築家：丹下健三（1913 生）、前川國男（1905 生）、坂倉準三（1901 生）

構造家：坪井 善勝（1907 生）、横山不学（1902 生）

第二世代

建築家：榎 文彦（1928 生）、磯崎 新（1931 生）、黒川紀章（1934 生）

構造家：木村俊彦（1926 生）、川口衛（1931 生）、松井源吾（1920 生）

第三世代

建築家：安藤忠雄（1941 生）、伊東豊雄（1941 生）

構造家：斎藤公男（1938 生）、渡辺邦夫（1939 生）、新谷真人（1943 生）、梅沢良三（1944 生）、佐々木睦朗（1946 生）、今川憲英（1947 生）

第四世代

建築家：隈研吾（1954 生）、妹島和世（1956 生）、坂 茂（1957 生）

構造家：金箱温春（1953 生）

第五世代

建築家：藤本壮介（1971 生）、塚本由晴（1965 生）

構造家：池田昌弘（1964 生）、佐藤 淳（1970 生）

『建築雑誌』（2018年06号）で、斎藤公男先生が「構造デザイン」の重要性について、次のように語られています。

「構造デザイン」や「構造家」について語ることがありますが、海外では構造エンジニアだけ。つまり、「構造家」は存在せず、「技術者」しかいません。世界的な常識は、アーキテクトは芸術分野を担い、技術者はそれをフォローするという役目です。

でも、日本は、建築家と構造家がコラボレーションする思想と土壌があります。国際的にそれは珍しく、日本の建築が評価されている重要なポイントです。よく言われていることですが、建築学科が理工系の学部にあり、教育のあり方がそうになっていて、そこからまず世界と違うわけです。日本の常識は国際的には非常識かも知れませんが、常識・非常識という主観的な評価ではなく、私はアーキテクトとエンジニアが協働する世界を大事にしていきたいと思っています。それを失うのは非常にもったいない。だから世界的にも珍しい「構造デザイン」の本質的な意味を育てていきたいと思っています。